

甲南高校「グローバル・スタディ・プログラム」
取材・文／金井文宏（本誌）

クラス全員が探求のスペシャリスト。 「知的であることはカッコいい」と切磋琢磨する教室。



「科学的な知識は、書物の上でも独習ができるが、真の人間教育は、人格の触れあいによってでなくては、完全は期せられない」

甲南学園の創立者である実業家、平生夙三郎の言葉です。明治・大正時代の知識偏重の画一教育に対し、「ひと創り」という本来の教育を重視しました。

2010年度、甲南高校では「グローバル・スタディ・プログラム」が創設されました。当初は高校3年間のプログラムでしたが、2016年度からは中学3年生から始まる4年間に延長されました。その1期生を担当する澤武潤子先生たちのチームは、同プログラムの「グローバルリサーチ（課題研究）」のテーマに「SDGs」（持続可能な開発目標）という枠組みを設定しました。

高校3年生の1期生31名は、各自こだわりの視点でSDGsに取り組み、論文を完成させました。その中で現場重視のフィールドワークを行い、精度の高い論文に仕上げた3名の生徒にインタビューをしました。

身近な気づきを研究テーマに。

金井 私は研究発表大会で「まちづくり分野」のコメントーターをしました。コンテツも文献調査、フィールドワーク、インタビューをして説得力のあるものだったと思います。まずは皆さんの研究テーマとそのテーマを選んだ理由や動機、それに研究方法を聞かせてもらえますか。

清水 私は「非正規雇用」をテーマに研究しました。今から約10年前、



「甲南グローバルリサーチフェア」のコメントーター。

小学生の頃にリーマンショックがあり、非正規雇用の人が多く解雇されました。その人たちは、寮などの住居からも追い出され、ホームレス化し、支援者と一緒に派遣村を作って相互扶助をしているというニュースもテレビや新聞で見っていました。

その頃、外資系の保険会社に勤めていた父が、2部門あったうちの1つの部署がなくなり、雇用が大変だと話すのを聞いていました。このことがずっと印象に残っていたのでテーマにしましたが、リサーチが週1回しかないので、探究を「非正規雇用をNPO等の民間の力で解決できないのか」に絞り込みました。

インタビュー調査では、総合労働センターを訪問し、職員の方から「正規雇用の仕事をあっせんするだけでは解決できない」ということを聞きました。そこで技能のミスマッチや、労働意欲などを考慮する必要性を学びました。

田上 私は「日本の震災と戦後補償」をテーマにしました。祖父が米軍による大阪空襲の被災者で、幼少の時からその話をよく聞かされていたので、小学校の時から調べていましたが、今回は大阪の空襲と沖縄戦について調査研究しようと思いました。

私たち若者は戦争は過去のもの

思っていますが、実は現在にも続いているのです。大阪空襲への補償を国に求める大阪空襲訴訟原告団・支える会の活動を知りましたし、多大な犠牲を生んだ沖縄戦に関する展示会では、実際に沖縄戦の遺品（ランチャー弾等）を見ました。

松田 「廃棄家電」というテーマを選びました。携帯電話が故障した時に、「修理に手間と費用がかかるので、新しいものに替えてはどうか？」と言われたのが疑問だったのです。かつて父にiPhoneを壊された時は自宅で業者が修理してくれました。そこで、今回は自分で直そうと部品を買ったら修理できた。それならば、修理されずに廃棄される家電はどうなるのだろうかと思ったのです。

中でも、レアメタルなどの貴重な金属資源を使っている携帯電話などの電子部品の廃棄がどうなっているのかをテーマにしました。そこで、父と一緒に現地調査のためハードウェアのシリコンバレー・深圳へ行きました。深圳は電子部品関係の企業が多く立地し、新しいことに取り組むベンチャー企業が多く、中国政府が最も多く投資を行っている都市で、金融機関が集まる中国のマンハッタン建設も行われています。

しかし、家電の処理ルートを追

跡し、工場まで行ったのですが、中には入れてもらえませんでした。タクシーの運転手に「日本から送られた廃棄家電はどう処理されているの？」と聞くと、香港が受入窓口になり、それから中国本土の都市へ運ばれて処理されるということでした。

研究を進める中での課題

金井 調査研究するにあたって、乗り越えなくてはならなかった壁はありましたか？

清水 非正規雇用の問題を論文化する際、読者に納得してもらうための客観性が重要だと考え、多くのデータに当たり、社会階層や年収などを調べ数値・グラフ化し、論証しています。そのため、苦手だった数学を勉強する必要性に迫られ、証明問題などを解いて探究力をつけるなどしました。おかげで証明の面白さがわかりました。

あと、私はフィールドワークがあまりできていなかったので、ま

ずは甲南中高の非正規有期雇用の職員の方の声を聞き取りました。部活の弓道が続けながら、空き時間に調査研究するのは厳しかったのですが、なんとか論文を仕上げられて達成感があり、嬉しかったです。

金井 数学を頑張ったんですね。非正規雇用問題について問題解決の方向性は見えましたか？

清水 非正規雇用問題に取り組み自分の活動を地域で認知してもらい、同じ活動をしようとする人を増やしていこうと思います。阪神間の



リサーチフェアでのプレゼンテーション(高2)。



左から清水優輝さん、田上一平さん、松田流星さん。

企業にも非正規雇用の解決を呼びかけたかと思っています。大学では労働や雇用問題を研究するため、経済学部に進学しようと思っています。

また、活動を継続するためにNPOとしてどうすればいいのかを調べています。派遣労働者を紹介する会社はあっても、非正規雇用の問題を改善しようという新しい価値観が浸透していかないのです。

将来の進路との結び付き

金井 調査研究の今後と大学などの進路について、田上さんと松田さんも教えてもらえますか？

田上 社会科は中学校の時に暗記モノだと思っていたのですが、グローバルリサーチをやるようになって、ものごとの関連性がわかるようになります。面白くなってきました。特に、戦時下におけるマスメディア、特に政府とメディアの一体化やプロパガンダについて関心を持つようになりましたね。

また、戦後の民間人への補償については、ドイツは軍人／軍属／民間人の区別なく補償していることがわかり、もっと調べたいと思っています。日本は軍人、軍属に6兆円くらいの補償をしながら、「民間人は公平に受けた被害だから受忍せよ」、つ



リサーチフェアでのポスター発表(高1)。

まり助かったからいいのではないかと、という政府や司法の判断があります。日・独の比較を通して、日本人の民族性についても考えたいと思っています。

今回の調査研究で、行動すること、主体的に考えることが重要だと分かりました。大学では法学部政治学科で勉強したいと思っています。

松田 廃棄家電など環境問題のことを調べていて、海外でも有名になっている日本人の「もったいない」文化に興味を持ち、日本におけるこの文化のルーツを探りたいと思っています。自分の行動としては、コーヒードと提携して週1回の「リベアカフェ」を開催し、得意な携帯電話の

分解修理を引き受けるとともに、北欧のリベアカフェでも行われている地域のコミュニティづくりを目指したいと思っています。

「廃棄家電の行方」というテーマに関しては、最終的な受け入れ先としては、広東省の汕頭市グイユ村が電子部品のリサイクル、「ゴミの街」として有名です。村は長年の分解回収から生じた重金属・プラスチック類のゴミで、川や土壌などが汚染され、健康被害が生じていると聞いています。こうした問題に関連する授業は高校にはありません。大学へ進学して環境情報学部などで学びたいと思っています。

今回、クラスのみんなで調査研究をしてよかったことは、他の人の発表を聞いて、わからなくて気になったことがあれば、その人に聞けばいいということです。私もフェアトレードを調べている友達に、「プロックチエーンと連携してやるとうまくいくのでは？」とアドバイスをしました。自分の調査研究だけでなく、他の人のテーマを知ること、多くのごとに興味が湧くようになりました。

金井 なるほど、クラスの全員が研究している総合研究所のようになって、研究員同士が議論している感じ

なんです。

松田 甲南は中高一貫で、中3時からこのプログラムに入り、1クラスなので仲がいいんです。他のクラスメートの発表を見て「これだけやってるんだ。この論文すこい」と素直に思うし、逆に互いの論文を回して、添削し合って、ポロカスに議論し合うこともあります。自分が不安に思っている調査研究の穴を突かれることもあります。週1回、図書館で取り組む2時間は刺激的な時間になっています。

田上 クラス31人全員が違うテーマで取り組んでいるので、全員がその問題のスペシャリストになれる。それをベースに違うテーマへと次々に話題が広がり、日常の会話レベルが高1の時よりずいぶん上がりました。

清水 それまでは話していなかったような社会問題を話すようになり、図書館の中でワークするので、互いに話し合う時間も増えました。貿易や鉄道など、自分の研究でも使えるような研究分野があり、クラスメートの話を熱心に聞くこともあります。一つ一つが個性のあるテーマ、研究なので面白いです。どんどん教養が広がっていく感じでした。

生徒の関心と意欲を引き出す学びのデザイン。



甲南高校
澤武潤子先生

中学3年時に「アドバンスコース」に在籍する生徒の中で、グローバルプログラムを選んだ31名を対象に、「グローバルリサーチ」という授業を展開しています（高1 11単位/週1回/1時間、高2 12単位/週1回/2時間、高3 12単位/週1回/2時間）。

高1では、阪神・淡路大震災の震災復興をテーマに文献をリサーチしたり、フィールドワークやインタビュー調査をして、調査研究の基本的な手法や調査マナーを身に付けるようにしています。また、国語科の「言語技術」、社会科の「グローバルヒストリー」など関連する授業も学びます。

それを受けて高2・高3では、生徒各自が国連のSDGsの取り組みの中から自分でテーマを選んで、調査研究を行い、論文にします。

当初は生徒のテーマが多岐にわたり、「内容の指導ができるかな？」という不安がありました。が、教員の仕事は生徒のファシリテーションであると割り切り、内容の指導は区切りごとに甲南大学の教員を含めた外部の専門家に委ねることにしました。

今日集まってくれた高校3年生は、グローバルプログラムの1期生で、私が高3から持ち上がった学年の生徒たちです。高2の4〜6月に「SD

Gsとは何か？」という授業を行い、生徒はそれを参考に7月末までに研究計画書を出します。9〜11月は毎月1回進行中のレポートをメールで提出させ、チェックやアドバイスをします。12月に研究発表大会を開催し、生徒は分科会に分かれ、中間報告を発表します。一般の方も参加できるもので、外部の専門家や父母、クラスメートから批判やコメントをもらいます。

甲南の生徒は、親が中小企業や自営業をしている子弟が多く、コミュニケーション力やプレゼン力は結構あると思います。ところが、内容を深める努力をしないので、「研究発表大会でちゃんと発表したい。ええかったしたい」というモチベーションによって内容を深めさせています。

この大会で発表した後は、「知的価値観が強くなりました。さらに、その後の1〜3月には短期留学（アメリカやニュージーランド）に参加します。海外の高校生が授業で自分の考えを述べ、将来についてしっかりと考えている姿に刺激を受け、その価値観をより確かなものにしてほしいと考えています。